巻頭エッセイ

日本の生きる道

稲葉興作
日本作業船協会　会長
日本商工会議所　会頭

会員の皆様、新年あけましておめでとうございます。

さて、いよいよ21世紀に入った訳ですが、これからの100年が日本にとってどのようなものになるか。勿論確かな予測をすることは難しいのですが、私は漠然とした不安感、他の言い方をしますとやや悲観的な見通しを抱いています。

振り返ってみますと、1901年は、その3年後に日露戦争に突入するという近代日本が国家として生き残れるかどうかという切迫した国際環境の中で、20世紀の巌頭に立っていました。その後の日本は、極めて大雑把に言いますと、大国主義を生きる道とし、浮沈を繰り返し今日に至っている、と言ってよいと思います。先の大戦後からの復興と繁栄も、凝縮してとらえれば、経済「大国」という言葉に象徴されるように、日本の大国主義は、戦後も結局変わらなかった、と言えるのではないでしょうか。

私は、こうした日本の国としての生き方、日本人の心の持ち方に、危惧の念を抱いてきましたが、最近とみにそれを強く感じるようになりました。

それをひとことで表わすのは大変難しいのですが、世の中の変化、時代の潮流を見極める自分の立脚点、見方というものを持っていない、それ故に、或る種の思想、制度が顕著になりそれによって他国が繁栄する、その追随者が多くなってくると、なだれを打ってそれに傾斜していくという思考行動の風土が、恐いなというようなことです。

断片的ですが具体的な言葉で言いますと、規制緩和が必要だと言われると、何でも撤廃すればいいという方向に走る。1億3千万が相互的に重層的に築き上げてきたものを一気に放擲して社会的混乱を引起こす。また、これからの経済は市場主義であると宣伝されると、価格破壊、組織解体、リストラに一斉に走り、デフレスパイラルを自ら掘ってゆく。情報化も、ついにIT「革命」とまで標榜され、かつてのマルクス・レーニン主義が顔負けする程の政府主導で一辺的な発想となってくる。

こういう現象は、どこからくるのであろうか。私は、ここ数年民間経済団体の長として、全国数百万の人、政治家、官僚、マスコミの方々の意見、ビヘイビアに接してきて、今の日本人の間に平均に充満している空気として、自己中心、勝ち馬志向、その反対としての過度な阻害感、自虐意識があると思えてなりません。従って、話せば解る、どころか、話せば話すほど物事はこんがらかってくるというのが現状で、これが日本社会の意思決定のスピードを遅らせ、内容を不明確にして実効を妨げている最大の原因のように思えます。

よく、これからの時代は変化の激しい時代だ、問題が複雑化を増し解決が困難になってくると言われます。私もそうであろうと認識しています。しかし、それに対応するのに、今の日本でよく聞かれるような、大きな転換期に来た、曲り角に差しかかった、構造改革が必要だ、創造的破壊に向う必要がある、といった大上段に構えた発想と手法は、あまり良いとは言えないと思います。

欧米のみならず、アジア、中南米の本当に優れた指導者と、永年に亘り交流を重ねてきて、いつも私が感じるのは、人間の根本はビッグキャパシティであり、バランス感覚であり、それによって裏打ちされた先見性が、いわゆるリーダーシップであるということです。

日本がキャパシティに溢れバランスのとれた国になることを祈念し、21世紀を迎えたいと思います。